聖　書：コリント人への手紙第二 11：16〜33
説教題：愚か者としての自慢
日　時：2025 年 3 月 9 日（朝拝）

11 章 1 節で「私の少しばかりの愚かさを我慢してほしいと思います」と前置きしていたパウロは、いよいよ今日見る 16 節以降で自分を誇る話を始めます。16 節：「もう一度言いますが、だれも私を愚かだと思わないでください。もし愚かだと思うなら、愚か者として受け入れてください。そうすれば、私も少しばかり誇ることができます。」パウロにとって自分を誇ることはあり得ないこと、考えられないことでした。彼は 10 章 17 節で「誇る者は主を誇れ」と言いました。これはクリスチャン全員に当てはまることです。神の御前で私たちに誇れるものは何もありません。誇るとすれば、私たちをただ恵みによって救ってくださった神を誇ることだけです。なのになぜパウロはここで自分を誇ろうとするのでしょう。それは一言で言えばコリント人のためです。コリント教会には自分を誇る偽使徒、偽教師たちが入り込んでいました。彼らは自分たちがいかに優れた人間であるかをアピールし、それに比べてパウロは何と取るに足りない人間か色々と批判をして、人々を引き付けていました。このままではコリントのクリスチャンたちは別の福音、誤った道へと引き込まれてしまいます。そこでパウロは彼らを引き戻すためにこの話をするのです。彼は 17 節で「これから話すことは、主によって話すのではない」と言っています。むしろ「愚か者として」の話であると言います。「多くの人が肉によって誇っているので、私も誇ることにします」と言います。この誇るという行為は決して彼の本意ではありませんが、コリント人たちに耳を傾けてもらうためにやむを得ずするのです。19 節に「あなたがたは賢いので、喜んで愚か者たちを我慢してくれるからです」とありますが、ここには皮肉が効いています。彼らは 20 節にあるように、偽教師たちによって様々なひどい目に遭っても、それを受け入れ、彼らのいわば言いなりになっていました。そんなあなたがたなら同じように誇る私の話も我慢して聞いてくれるでしょうと言っているわけです。

そして彼は 21 節で「言うのも恥ずかしいことですが、私たちは弱かったのです」と言います。10 章 1 節で見ましたように、パウロはキリストの使徒として「キリストの柔和さと優しさ」をもってコリント人たちに接していました。仕えるしもべの姿勢で関わっていました。これがコリント教会では軽んじられたようです。偽教師たちは「パウロの手紙は重々しいが、実際に会ってみると弱々しい」と見下していました。彼は

力強く、自信にあふれた、頼もしい人間ではないと。そんな偽教師たちの見方を共有するコリント人たちも現れ始めていました。そんな状況を見てパウロは私たちは弱過ぎたと言っているわけです。これはコリント人たちの見方に合わせた言い方です。これではあなたがたにアピールできないので、愚かなことだが、偽教師たちと同じ土俵に上って自分を誇る話をこれからするというのです。こうして何とかコリント人たちに耳を傾けてもらって、キリストによって立てられた真の使徒は誰なのか、またその福音とはどのようなものなのか知ってほしいと願うパウロなのです。

彼は21節後半で「何であれ、だれかがあえて誇るのなら、私は愚かになって言いますが、私もあえて誇りましょう」と言って、その話を始めます。まず「彼らはヘブル人ですか。イスラエル人ですか。アブラハムの子孫ですか」と問います。偽教師たちは自分たちがそのような者であると誇っていたようです。ここから偽教師たちはユダヤ的背景を持つ人々、ユダヤ人であったことが伺えます。この三つの表現にそれぞれニュアンスの違いを見出すことは可能かもしれません。ある人は順番に人種的、社会的、神学的な強調点があると見ます。しかしここではそれほどその違いに注目する必要はないと思います。偽教師たちは自分たちの出身、血統、その民族性に基づいて自分たちを誇っていました。パウロは彼らに対して、私もそうだ！と述べます。私もヘブル人であり、イスラエル人であり、アブラハムの子孫であると。だから私はこの点で彼らに何ら劣っていない。私は彼らと対等である！と。このようにして予想された通りのバトル、自慢大会が始まります。これに聞く人たちは思わず引き込まれます。パウロはあえてこのようなスタートの仕方をして、コリント人たちの関心を引き付けようとしたのでしょう。

続く22節では「彼らはキリストのしもべですか」と問います。ここから偽教師たちは自分たちをそのように主張していたことが伺えます。その彼らに対してパウロは今度は「私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです」と語ります。今度は対等というレベルで済ますことができないとパウロは主張します。私は彼ら以上にそうなのだ！と。「狂気したように言う」とは、それほどキリストの使徒としてのパウロの自覚が強かったことを示しているのでしょう。そう述べた彼は何を語り出すと予想されたでしょうか。おそらく多くの人はキリストの使徒としての業績が並べてられるのではないかと思うのではないでしょうか。設立した教会の数とか、救いに導いた人の数とか、宣教師として遣わした人の数とか、・・・。しかしそうではありませんで

した。彼が語り始めたのは「労苦したこと」についてでした。彼はこの後、自分が受けた苦難や弱い状態について語ります。これは思わぬ方向への展開です。彼はこうしてキリストのしもべとしてのしるしは、その奉仕のために経験した苦難や弱い状態にあると言っているわけです。ここにキリストの真の使徒であることの証明があると言っているのです。

以下の苦難のリストを大きく 4 つの部分に分けて見ることができるかと思います。まず一つ目は 23 節後半〜26 節までの投獄や迫害という苦難です。彼は「牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました」と語り、具体的に 24 節で「ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けた」ことについて述べます。これは申命記 25 章 3 節の以下の言葉と関係します。「四十までは彼をむち打ってよいが、それ以上はいけない。それ以上多くむち打たれれば、あなたの同胞はあなたの目の前で卑しめられることになる。」 この規定を越えることがないように、ユダヤ人は一つ数の少ない 39 回まで打つという罰を与えることがあったようです。パウロはユダヤ人から迫害される中で、この鞭を受けることが何と五度もあったと言います。またローマ人に鞭で打たれたこともありました。ローマ人の鞭はその先端に金属がはめられていて、それで打たれると肉片が飛び散るほどだったようです。パウロはピリピで投獄された時、鞭で打たれて、大変な傷を負ったことが使徒の働き 16 章に記されていますが、何とそのようなことが三度もあったと言います。また「石で打たれたことが一度」とありますが、これは使徒の働き 14 章 19 節に記されている第一回伝道旅行のリステラにおける出来事でしょう。人々はパウロは死んだものと思って町の外に引きずり出しましたが、パウロは瀕死の重傷状態から奇跡的に回復しました。また「難船」し、「一昼夜、海上を漂ったこともあります」とあります。後にパウロが乗ったローマ行きの船が難破したことを私たちは使徒の働き後半から知りますが、このコリント人への手紙はそれ以前に書かれた手紙ですから、その前にも同じような難船があったことになります。しかも三度も！です。一体何という生涯をパウロは歩んだことでしょう。

二つ目は 26 節にある伝道の旅に伴う苦難です。昔は川を歩いて渡らなければならないことも多くありました。そのような川の難。また盗賊に襲われること、また同胞ユダヤ人や異邦人から受ける難、また町で、荒野で、海上で受ける難、偽兄弟による難。このような難を伝道旅行の中でパウロは繰り返し経験しました。

三つ目となる 27 節は宣教活動とは別に自分の生活を支えるための自活による苦難と言えます。27 節最初の「労し苦しみ」とは、そのことを指すと考えられます。テサロニケ人への手紙第一 2 章 9 節の次の言葉が参考になります。「兄弟たち。あなたがたは私たちの労苦と辛苦を覚えているでしょう。私たちは、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。」そのためでしょう。パウロは眠ることができない日々もありました。昼も夜も働かざるを得なかったからです。またそのために食べ物にも事欠く時がありました。「寒さの中に裸でいたこと」もありました。

そして四つ目に 28〜29 節の「日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかい」がありました。重荷という言葉はプレッシャーとかストレスを意味する言葉です。先に見た肉体的な苦しみばかりでなく、精神的な重荷も日々パウロにはのしかかっていました。ある人は、心配は無用であるとイエス様は山上の説教で言われたのではなかったかと言うかもしれません。確かに自分のためにはそうです。しかし他の人を思うがゆえの健全な心配、心遣いというものはあるのです。29 節で「だれかが弱くなっているときに、私は弱くならないでしょうか。だれかがつまずいていて、私は心が激しく痛まないでしょうか」と彼は言います。パウロは I コリント 12 章 26 節で「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです」と言っていました。彼は自分と他者を切り離して考えることをしませんでした。彼は特に弱い人のことを心にかけました。その他者の益のために喜んで自分の権利や自由を制限し、また放棄して歩みました。そういう彼には他の人の重荷を担うがゆえの多くの労苦と痛みがあったのです。

これらを受けてパウロは 30 節のように言います。「もし誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ります」　ここでも彼は誇ることを良いこととは思っていません。「もし誇る必要があるなら」という言い方には誇ることへの躊躇、あるいは嫌悪が示されています。しかしどうしても誇る必要があるなら私は自分の弱さのことを誇ると言います。これは一見とても不思議な言葉です。強さを誇るというのなら分かります。たいていの人は自分の強さや優れた点を誇ります。しかし弱さを誇るという人はいません。これは人間の感覚では意味不明です。パウロはこうして偽教師たちの反対のことを述べているのです。いわば彼らの表現のパロディなのです。こうして彼らの

態度を愚かなものとして退けているのです。しかしもちろんここに重要なメッセージがあります。それはどういうことしょうか。これまで見て来た苦難のリストに示されているような弱い状態に自分があることをパウロが良しとするのは何と言ってもこれが主に倣い、主に従う道だからです。何よりも主ご自身が私たちの救いのために、このように労苦し、ご自分を使い果たし、私たちの重荷を担う道を進んでくださいました。そのイエス様は私たちにもご自身の後に従って来るようにと招いておられます。その招きに従ってパウロもこの道を進んでいます。これは決して人々から軽蔑され、見下されたままで終わる道ではありません。イエス様が十字架を経て復活の栄光へと入られたように、イエス様に倣って仕える道を行く人の先には真の栄光が用意されています。しかしそれだけでありません。この後の 12 章 9〜10 節で語られることですが、このような弱い状態の中で主により頼むことを通して、その人は神の恵みをより豊かに経験する者とされます。私たちはイエス様に従う苦難の道を進む中で、ただ苦しい思いをして歩むだけではないのです。その弱さの中で神により頼み、神の恵みと栄光がより豊かに現わされる器として用いていただくことができるのです。それゆえパウロはもしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さのことを誇ると言ったのです。これがパウロの姿勢であり、神の前に真実な告白であるということが 31 節で述べられています。

最後の 32〜33 節にもう一つのエピソードが加えられています。この時のことは使徒の働き 9 章 23〜25 節とガラテヤ人への手紙 1 章 17 節にも記されていて、それらを考え合わせると全体像がはっきりします。パウロはダマスコ途上であの有名な回心を経験しますが、その直後からダマスコで宣教を開始し、またダマスコ近郊のアレタ王が治めるアラビア地方でも宣教をしたようです。そのことを快く思わないユダヤ人とアレタ王が協力してパウロを捕らえようとしました。そんな中、パウロは窓からかごで城壁伝いにつり降ろされ、難を逃れました。ある人はこれを武勇伝のように読むかもしれませんが、パウロにとっては回心早々キリストに従うがゆえの恥辱を味わわされる経験でした。大祭司からの信任状をもってクリスチャンたちを捕らえるという名誉ある働きに出発したのに、キリスト信者になった直後、夜中にかごに乗って逃亡せざるを得ない者となりました。あまりにも弱い者の姿です。世の中から見れば恥ずかしい姿、哀れな者の姿です。しかしパウロはこうしてキリストに従う道とはこのような道なのだということを心に深く刻まれたのでしょう。あの日以来、彼はキリストに従うがゆえの弱い者としての道を進んでいます。そういう歩みの中でもし何かを誇ら

なければならないとしたら、私はこの弱さのことを誇ると言っているのです。

私たちの前にも二つの道があります。一つは偽教師たちの道です。自分の人間的能力やこの世での成功・業績・評価・地位を誇り、また豊かな生活を誇ること。そしてこれとは反対の苦難や低い状態を見下し、軽蔑し、なるべくこれに関わらないようにすることです。もう一つはパウロたちが進んだ道です。彼にとって自分を誇ることは愚かです。誇る者は主を誇れ、です。そんな自分がもし誇るのであれば、それは自分の弱さを誇るというものです。それは主に従う苦難の道を進むことと結びついています。主に倣って他者の救いと益のために進んで犠牲を払う道を行くことです。しかしそこでその人は神の恵みに支えられて、次回 12 章 10 節で見るように「私が弱いときにこそ、私は強い」と言うことができるのです。

私たちも私たちの周りで、主に従って身を低くして歩んでいる人たちを低く評価しないようにしたいと思います。華やかな人、自分を自慢する人に目を留めて、そちらを高く評価する者でないように。それは偽教師たちに従う歩みと同じです。そうではなく、キリストに倣って仕える歩みをしている人、進んで低い道を選んで進む人、苦しむ者とともに苦しむ人。そういう弱い状態に進んで自らを置いて歩んでいる人々に目を留め、尊ぶ者でありたいと思います。

そして私たち自身も同じその道を行く者でありたいと思います。主を信じるクリスチャンであるなら、主はそれぞれが置かれた状況の中で、ご自身に倣う歩みへ進むようにと招いておられるはずです。与えられている賜物を御心に従って用いて人々に仕えるように。自らの快適な生活を後回しにしても、人々の救いと必要のための働きに身を投じるように。苦しみにある人々とともに歩む者となるように。御国が早く来ることのために心と体を献げて労苦する者であるように。パウロの証しに導かれて私たちも主の足跡に従う歩みへと励まされたいと思います。そのような者には素晴らしい約束が与えられています。その人はそこで主の恵みにより頼み、主の恵みに支えられることができます。ですからその人は私は自分の弱さのことを誇ると言うことができます。そのことを覚えて、キリストのために苦しむ道を恐れず、厭わずに進む者でありたいと思います。その歩みにおいて神の恵みを豊かに経験し、神の力によって神の栄光を現す器とされる者たちへ導かれて行きたいと思います。